

御霊に導かれる人生

(使徒八・二五〜四〇)

『御霊に導かれて』。これは私たちの教団の三十周年記念誌のタイトル。ちなみに五十周年誌は『みことばに立ち、御霊に導かれて』である。この変遷にはかつて『聖霊充滿』を非常に強調したヨイド純福音教会の現在の担任牧師であるイ・ヨンフン牧師が良く語る『みことば充滿・聖霊充滿』と同じような意図を感じる。そこにはペンテコステ運動が感情の高まりだけを強調する「熱狂主義」ではなく、自分たちは聖書に立脚した堅実な福音主義の一翼を担う運動であるという、強い主張があるように思えるのだ。閑話休題。今朝は玉川牧師から「ペンテコステ的なメッセージをしてほしい」ということで招かれたのであるが、先ほど開いた聖書に登場する伝道者ピリポの記述から聖霊に導かれる人生について三つお話ししたい。

一、命じられるままに

このセクションの始まりは聖書によって接続詞が異なる。新共同訳は「さて」、新改訳は「ところが」であ

る。これはどちらにも訳せるのだが、文脈から考えると個人的には逆接とする方がよいと思う。というのもこの前の段落はピリポによるサマリヤ伝道についての記事であるが、一言でいえばそれは「成功」であった。使徒一・八の約束通りエルサレムで起こった力の伝道はサマリヤでも実現し、使徒たちの目の前で聖霊の大傾注が起こったのだ。そしてピリポは間違いなく、この伝道の中心人物であった。しかし主はピリポにそのリバイバルを離れ、一路ガザに下るよう命じる。大成功の伝道地を途中で後にするわけだから、ピリポには未練があっても不思議はない。しかしピリポはすかさず立って出かけて行った。まさに「即刻従順」である。御霊に導かれたら、それに従う。これが大切なのだ。

二、機会を生かして

エルサレムから北のサマリヤから一転エルサレム南西のガザに赴いたピリポであったが、彼が出会ったのはエチオピアの宦官であった。この宦官は神殿での礼拝では飽き足らず馬車の中で聖書を音読していた。真理に飢え乾いていたことが見て取れる。しかし当時のユダヤ教では彼は二重の意味で「招かれざる客」であった。彼は

異邦人（おそらくは黒人）であったし宦官つまり去勢された男子でもあったのだ（申命記二三・一以下参照）。彼は真理を求めて遠くからエルサレムに來たのだが、彼の願いは満たされなかった。彼に用意されていたのは「異邦人の庭」であり、ひよっとしたら、そのカストラートを悟らせないために沈黙を保っていることしかできなかったのかもしれない。しかしピリポは御霊に導かれ、そうした宗教的「タブー」を破って宦官と対話を始めたのである。御霊の導きに従うとき、私たちの人生を変える出会いが与えられるのだ（使徒一六・六、七）

三、イエスを伝える

イザヤ書五三章を読んでいた宦官は「このしもべとは誰か」と問うた。ピリポはどう答えたか。三五節にはこうある。「ピリポは口をひらき、この聖句から始めて、イエスのことを彼に宣傳伝えた」彼がのべ伝えたのは「基本的真理に関する宣言」でもなければ、「規則教規並びに諸規定」でもなかった。彼が伝えたのはイエスであった。天下を救いうる唯一のお方であるイエスのご人格と働きについて、ピリポは大胆に語ったのだ。結果はどうだ。宦官は自ら洗礼を志願し、ピリポが取

り去られた後も喜びに満ちて旅をつづけた。これは推論だが、喜びにあふれた彼がそのままイザヤ書を読んでいたら、彼の喜びはますます増し加わったはずだ。というのもイザヤ五六・三〜五には神の契約を守る宦官に対する豊かな祝福が預言されているからである。

* * *

ペテルを離れることが決まった際、真つ先に思い起こした聖書箇所はここだった。七年七か月の在任中に教会建築の借入は終わり、受洗者も毎年起こされ、神学校や学会などの奉仕の場も与えられた。しかし主は私に次の場を示された。そこは前任者が突然の辞任、再登板した母も体力の限界。そういう場所だった。だが私は「伝道者」。聖霊とみ言葉に従い、そこに行くとはペテルでそうであったように様々な出会いを与え、宣教は前進し、なんと神学校が私について来るという驚くべき展開を見た。『御霊の力に驚かされた』のである。友よ、自分の思いを超えた御霊の導きに「即時従順」するなら、あなたの人生はあなたが思う以上になる。さあ今週も聖書に聞き、御霊に導かれ、機会を生かして、イエスの名を伝えようではないか。